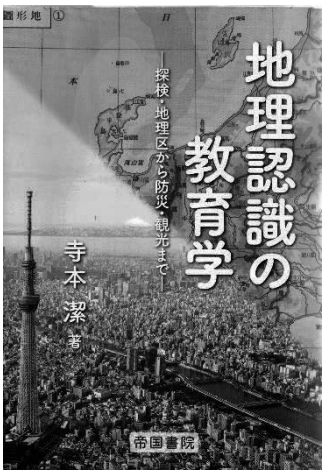
書　評

寺本潔著『地理認識の教育学
－探検・地理区から防災・観光まで－』
（帝国書院，2021 年，135 頁）
ISBN978-4-8071-6575-9C3037



本書は，玉川大学教授寺本潔氏（前愛知教育大学教授）が玉川大学の定年退職を前に，これまでの 7 本の地理教育論を一書にまとめたものである。戦前の地理教育論や修学旅行史に関する論稿も収録され，歴史的な視点も含む「多面的・多角的な」著書として，知的な刺激に富む本である。章立ては以下のとおりである。

プロローグ
第Ⅰ部　探検：子どもにとっての「場所の体験」と空間認識の発達－手書き地図と探検行動　　に着目して－
第Ⅱ部　地理区：国民科地理の再評価
第Ⅲ部　修学旅行史：浅井治平による旧制中学校における修学旅行指導
第Ⅳ部　防災：防災の地理認識と社会資本の役割
第Ⅴ部　観光－その 1：教育旅行で培う地理認識と観光教育
第Ⅵ部　観光－その 2：実践的な観光教育のための 5 つの教材コンテンツ
第Ⅶ部　観光－その 3：観光産業を支える情報の働きの授業－函館市弥生小学校 5 年生への出前授業を通して－
エピローグ

章立てから分かるように,防災や観光という新たな研究視点からの論稿も含まれている。寺本氏は，常に先端的な視点から，新たな研究分野を切り開いてきたが，本書によってそれらをまとめて一読でき，氏の先端世界に体系的に浸ることが出来る。しかも氏の研究のベースに，地理教育史研究があったことが分かり，新しいものを生み出すためには，過去を見る視点も重要なことにも気づかされる。

さらに重要なことであるが，本書全般を通して子どもの視点が大前提となっている。観光に関しても，子どもがガイドや観光資源を発見・開発するプロジェクトを進める活動が示されている。子どもたち自身の発想やプロジェクトデザインを科学的に理論づける学習としての地理学習なのである。しかも，本書の随所に子どもたちが活動する様子が写真入りで紹介されている。それらは，インタビューも含まれるフィールドワークとその記録・整理というアクティブな学びである。このような学習が社会科体験として普通になると，社会科嫌いがなくなることはもちろん,主体的に地域を調査し,将来を考える市民（大人）が育っていくだろう。これこそ，民主社会の形成者を育てる社会科学習に他ならない。本書はそのような教育を子どもたちの姿から指し示す本である。

（土屋武志）